

た苞片とされたが、寫眞でみると標本の左側の小型の分翼の出る筈の場所が缺けていて見られないからのことで實は天臺シデに極く近いものである。この発見はメタセコイア、コウヤマキなどと同じく、幾つもある北半球の中新世のフロラ要素が主として、歐州、西南支那・周東海地區（東支那海をとりまく地域で日本はこれに含まれる）、北米の四地區に分斷され、その絶滅をまぬかれたものが夫々の地區に endemic の種として或は屬として残っているもの又一例を加えるものである。近縁のカンパ屬でかゝる種類を一つあげると北米に *Betula tenta* L., 日本から滿鮮にアズサ (*B. grossa* S. et Z.) 西南支那に *B. Fargesii* Franch. がある。歐州には自生種がないが恐らく相當種の化石があるであろう。この種の系列の分布要素はこうした四地區の種類を對比させることで、未発見の種の豫想、或は化石檢定の手掛りの期待もできると思うが、それにも増して日本のフロラの基盤の問題、種の分化の問題により資料となるので今實例を集めている。

なおサワシバについて遠藤博士の記事によると、朝鮮の中新世には稀でないが日本では鮮新世に入つても甚だ稀である。しかるに洪積世に入ると鹽原などに普通であるというのは、現在はブナ帯に多いことゝ照し合せて興味がある。單に當時が暖かつたから、同種がなかつたという様な見方ではなく、朝鮮半島の方からの渡來であり、そして存外若い時期（洪積世かその直前）に漸く全国的に普通になる程に展開し終つたのではないかと見られるからである。

### 〇二三の新來雜草について (佐野純雄) Sumio SANO: New records of some naturalized plants.

相州田浦長浦東京灣倉庫會社の地内に北米産の新來雜草ラシャナス *Solanum elaeagnifolium* Cav. が見出されたのはさきに本誌に報じたとほりであるが、その後また未記録かと思はれる二三の種類を発見したのでこゝにこれを報告する。その一は *Lepturus* に近い *Pholiusrus incurvis* Schinz なる小禾本で、叢生した株をなし莖葉や花穂が内曲する習性をもっている。その鞭のごとき弓なりの花穂が「なぎなた」にも似ているのでスダメノナギナタと呼ぶことにした。その二はヤブジラミ *Torilis* の一種 *T. nodosa* Gaertn. で、果序は無柄で纖梗を有せず果實が球狀に集つて節毎に着いているのが特徴であるからタマヤブジラミとした。その三は繖形科の *Scandix Pecten-veneris* L. でナガミノセリモドキといふ和名があり、その角（ツノ）のやうな果實は一見繖形科とは思へないやうな奇態をしている。これは矢部吉禎博士の *Revisio Umbelliferarum Japonicarum* (1902) に既に登載されていて明治の末年にわが國に渡來し栽培されたことがあるらしい。當時の標本が東大にあるといふ。その四は十字科の *Lepidium Draba* L. で *Lepidium* の花實に *Draba* イヌナツナの葉を附けたやうなものであるから、イヌナツナの「イヌ」をとつてイヌゲンバイナツナとした。莖葉は無毛で花は白く實は小さくて圓い。以上はみな歐州原産の種類で北米にも歸化しているものであるが、今回ののはみな北米から渡來したと想像される。*Scandix* は未記録ではないが再來したものと思はれる。種類の同定は久内、靱山兩氏にお願いした。なほ倉庫會社の地内に見出される外來雜草には次のやうなものがある。ツクミセンノウ *Melandrium noctiflorum* (花柱3), マンデマ *Silen gallica*, コシミノナツナ *Lepidium perforatum* カキネガラシ *Sisymbrium officinale*, ハタザホガラシ *S. altissimum*, クヂラガサ *S. Sophia*, ミヤガラシ *Rapistrum rugosum*, コシナガハハギ *Melilotus indica*, シナガハハギ *M. suaveolens*, イヌムラサキ *Lithospermum arvense*, カミツレモドキ *Anthemis Cotula*, *Xanthium* sp.